

看護思想を通して見た

F・ナイチンゲール著『救貧覚え書』の今日的価値と、  
社会福祉教育におけるその教育的活用効果について。

The present value of Florence Nightingale's "Notes  
on Pauperism", and the effect of educational use in  
social welfare education.

金 井 一 薫

## 看護思想を通してみた

F・ナイチンゲール著『救貧覚え書』の今日的価値と、  
社会福祉教育におけるその教育的活用効果について。

The present value of Florence Nightingale's "Notes  
on Pauperism", and the effect of educational use in  
social welfare education.

金井 一薫\*

Hitoe Kanai

はじめに

1章：『救貧覚え書』の論点と書かれた背景

2章：クリミアにおけるナイチンゲールの実践に見る“救貧”の原点

3章：「看護思想」とは何か

4章：看護思想と社会福祉思想の接点とその重なり

5章：『救貧覚え書』の教育的活用効果について

結 び

はじめに

近代看護の創始者、フロレンス・ナイチンゲールが、クリミア戦争から帰還して後に、およそ150編もの論文を著したことは、世にほとんど知られていない。

その著作の代表的なものに『看護覚え書』があるが、これは文字どおり看護をテーマとした著作であるだけに、1859年の発刊と同時に今日に至るまで、看護の世界においては読み継がれ、研究もされ続けていて、その価値はますます高まっているのが現状である。

ところが、ナイチンゲールが取り組んだ分野には、看護の領域の外に、英国陸軍の衛生問題、インドおよび植民地の衛生と福祉、病院とその建築、統計学、社会学、宗教学、哲学などがあ

り、著した論文のタイトルだけから見ても、その領域は広大な範囲に及んでいるのがわかるのである。

今回本稿で取り上げた『救貧覚え書』は、彼女の著作分類の中では、社会学の分野に属しており、19世紀の英国社会がかかえていた貧困という病相を、ナイチンゲールがどのような視点で見つめていたかを知る上で貴重な文献のひとつになっている。

彼女が“救貧”というテーマで論文を書いたのは、これが最初で最後の唯一のものであるが、当時の社会の世相と、多くの社会改革運動の流れと質とを一望しながらこの『救貧覚え書』を読んでいくと、そこにナイチンゲール独自の“社会”と“人間”を見つめる豊かで確かな眼が在ることに気づくのである。しかもその視点は、今日の「社会福祉思想」の中核を彩る

\* 社会福祉学専攻

“自立への援助”の考え方と重なるところ大であり、現代福祉のあり方を、100年前に先取した意見の数々に驚かざるを得ない。

本稿では、世に知られざるこの『救貧覚え書』の今日的価値を問うにあたって、まず、その覚え書の内容を吟味して本質を抽出し、それが今日明らかになっている看護思想とどのようにつながりをもつのかを考察した上で、現代社会福祉思想との関連において、その接点を見いだしていこうとするものである。さらに『救貧覚え書』が、今日の社会福祉教育、とりわけ“介護概論”の授業の中で十分に活用できている現状を報告したい。

### 1. 『救貧覚え書』の論点と書かれた背景

「我が国の首都ロンドンでは、毎年700万ポンドにのぼる金額が、救済法および慈善事業に費やされている。しかしその結果はいかなるものだろう。救済の対象たる貧民は、直接的にも間接的にも増大しているのである。ロンドンの貧民は、過去10年間で2倍にもふくれあがっている<sup>1)</sup>」

こうした書き出しで始まる『救貧覚え書』は、1869年3月にフレイザーズ・マガジン誌に掲載された。

1869年頃の英国、ことにロンドンは、職を求めて地方から流入する労働者で溢れかえっていたが、彼らの大半は自立して生活していくことのできない被救済民に陥っていくことが多かった。そのため社会全体は、増大する貧民の救済に膨大なエネルギーを注ぎ込んでいた時期である。

貧民の救済は“救貧法”という法律によって、一定の枠の中で行なわれたが、その他にも篤志家たちが寄付した多額の救済金が、救済活動に当てられており、両者によって費やされる額は多大なものになっていた。

こうした救済対策事業は、言うまでもなく社会福祉の原点であり、事実、19世紀の中頃から、さまざまな形態の社会事業が展開され、発展し

ていくのである。

英国においては、ナイチンゲールが救貧覚え書を書いた年、すなわち1869年に新しい動きが起こった。それはCOS（慈善組織協会）が発足したことである。COSの成立事情は比較的はつきりしている。それは「各種の慈善活動が全国で不統一のまま行なわれ、競合や対立さえもおこすにいたっていた。その結果、無差別救済の弊害が大きくなるとともに、訓練も準備もないワーカーたちがセンチメンタルな善意だけで救済に従事するようになった。さらにまた、善意は一種のファッションとなり、慈善事業に参加することは社会の椅子をのぼる一步とさえ考える風潮もでてきた。慈善は与える者の同情心を満足させるだけであり、対象者の真のニーズないし苦難には無関係という危険な状態もあった<sup>2)</sup>」からである。

COSの活動から近代的なケース・ワークが始まったとも言われるが、それはともあれ、それまでばらばらだった多くの慈善事業団体が、COSのもとに一つにまとめ上げられ、統一した見解のもとに活動が開始されたことは確かかなようである。

しかしながら、それは増大する一方の貧困層を減らせないばかりか、本質的解決にはほとんど寄与しなかった。この場合、なぜ貧困層が増えるのか、どうすることが根本的に貧民を救うことになるのかという、具体的かつ根源的な思考が必要であったはずである。

ナイチンゲールが指摘したのは、まさにそのところである。

ナイチンゲールは言う。

「貧困者であっても手足を動かせれば、何とかして自立することができるものである。

我々がまず第一にすべきことは、病人（無能力者）たちが療養できる場所を用意して、かれら全員を救貧院からそこへ移すことである。これについてはかなりな規模で行なわれつつあるし、また実施されようとしていることでもある。

その次にすべきことは、飢餓状態にある人々

に、彼らが一人で食べてゆけるように、その方法を教えることである。飢餓状態にあるという理由で決してこうした人々を罰することではない<sup>6)</sup>と。

さらに彼女の主張は続く。

「自分で仕事を見つけて働くという自発的な労働者の数を増やすことによって、貧困状態にある人々を減らしていくというのが救貧法の目的であるべきなのに、このことに関する限り、この法律は完全に力を失ってしまった。

個人的に行なわれている慈善事業も崩壊し、その内容はさらに悪くなっている。それは不幸な事態を増大してさえしまった。

“救貧院に収容する施策 (the workhouse test)” も完全に失敗した。また“たいして生産的とはいえない仕事を与える施策 (The unproductive-labour test)” も同様に失敗している。そうしたことは、働けないあわれな貧困者たちを少ない報酬でひどい目に合わせているだけであって、こうした人々にとって懲罰は何の役にも立っていない。なぜなら救貧院は満杯で、そこにいる人々は現に飢えているのだから<sup>4)</sup>と。

ここにおいてナイチンゲールの論点は明快である。

すなわち、物や金を与えて貧困者を救おうとしても、それはほとんど意味がない。そうすることによってますます彼らを駄目にしてしまうというのがその主張の中心にある。真の救貧とは、彼ら自身の力を使って自力で生活していくことを学ばせることである。この場合、彼らに懲罰を加えるという手段を取るべきでもない……。

そうした考えに基づいて、彼女はいくつかの具体的方法を提案したのである。

その具体策の第一は、救貧院に住む病人や虚弱者を病院に移して、そこで必要なケアを受けさせることであるという。この発想は直ちに実行に移され、救貧院病院における看護体制は、それ以降見違えるように改善されていった。ナイチンゲール看護学校卒業生たちのうち、優秀

な人材が救貧院病院に送り込まれ、ナイチンゲールの指導の下に大きな成果を挙げていった経緯がある。

具体策の第二は教育の問題である。

「代々に互る貧困状態の中から、子供たちを救い出したいのなら、心身両面から教育し直せば、こうした子供たちをそろって善良な市民に生まれ変わらせることができる<sup>5)</sup>」

「身体が丈夫で、前科のない貧困者であれば、彼らに対する救貧法の本来の目的は、彼らに罰を加えたり食物を与えたりすることではなく、彼らを勤勉で自立できる人にするために訓練することである。これは国民教育の一環であり、こうした教育は、ある程度、読み書き、計算をすることによって、あるいは道徳的なことを教えることによってなされていくものであろう<sup>6)</sup>」

こうした教育への提言は、この時期にはまだ公教育が実施されていなかったことを考えれば、その先見性は見事だと言わなければならない。ナイチンゲールの貧困者へのテーマは、彼らを「まとめあげて、秩序と勤勉さと自立の方向に導いていく<sup>7)</sup>」ことにあったのである。

この他にも、ナイチンゲールは具体的な提案をしている。例えば、この当時はまだ職業紹介所のようなものがなかったことから、「労働力と需要、あるいは労働力と労働手段を結びつける機関<sup>8)</sup>」の存在の必要を主張した。さらに、これは今日的発想からみればやや特異な感じがするが、“移民”を強く奨励している。移民という視点は、「外国貿易の大部分は、もし英国から移民として海を渡らなかつたとしたら、おそらくこの国を食いつぶしていただろうと思われる人々との取り引きによって成り立っている。そして現在、わが国の人口のかなりの部分の人々の生活は、海の向こうに住んでいるこれらの人々によって成り立っている<sup>9)</sup>」という認識に支えられて出てきたものである。

このように、『救貧覚え書』で指摘している観点は、今日においても十分に納得できるものであり、そこに彼女の思考の着実さと、事の本質を見抜く確かな眼とを感じ取ることができる。

ちなみに、ビショップ<sup>10)</sup>によれば、発刊当時「この『覚え書』には、かなりの関心が寄せられた。寄付を求める開拓関係者や社会事業関係者から、かなりの手紙が寄せられ、彼女は彼らと頻りに文通することになった<sup>11)</sup>」とある。また、高名な文学者、カーライルは「ナイチンゲールの論文は、最近自分がこの問題に関して読んだものの中で最も現実的なものであり、最高のものだと思う<sup>12)</sup>」と語ったという。

## 2. クリミアにおけるナイチンゲールの実践にみる“救貧”の原点

ナイチンゲールが貧困者層の人々に関心を寄せたのは、なにもこの『救貧覚え書』を書くためではなかった。貧しい人々への並々ならぬ関心は、彼女の少女時代から持ち続けていたものである。

上流階級に生まれたナイチンゲールは、その階層に生まれた者の社会的責務の果たし方を母親から学んだのであるが、母親のそれは馬車の中からスープや物やお金を与えるという接し方だったのである。そうしたやり方では決して貧しい者たちを救うことはできないことを、結果的にこの目で見て知ってしまった彼女は、家族に隠れて貧しい農民小屋を訪ねては、そこにいる病人の看病をしたり、汚れた部屋を清潔にしたりして、具体的援助を惜しまなかった。

そうした経験の積み重ねによって、彼女の中では次第に「看護」というテーマが明確になっていくのであるが、かのクリミア戦争に赴いた頃（1854年～1856年）には、ナイチンゲールの頭の中にはくっきりと、看護の姿とそのあるべき方向性が定まっていたようである。

ナイチンゲールにとってのクリミア体験の意味は、様々な角度から考察できるが、ここでは、彼女が兵士たちとどのようにかかわったかという点に光りを当てることによって、彼女が考えていた“救貧”の本質をみていくことにする。

ところで、クリミア戦争に従軍した兵士たちとは、いったい何者であったのだろうか？

彼らは、英国における貧困者層の中でも、比較的身体の丈夫な若者たちであった。しかし彼らは決して質の良い兵士とはいえなかった。故郷の村の恥さらし、一族の厄介者といった若者たちが応募して入隊していたからである。ウーダム-スミスによれば「兵卒とは、笞や体罰や、教訓や鉄の規則で服従させる以外に扱いはない、危険きわまる野獣であった<sup>13)</sup>」

そして、彼らに対する将校たちの態度は皆一様であり、彼らは兵卒たちを自分たちと同じ世界に住む人間とはみなしてはいなかったのである。

その結果何が起こったのだろうか？

「野獣」だの「人間の屑」だの「ならず者」だのと呼ばれて決して人間扱いされなかった兵士であったから、クリミアの地で倒れても、まともな治療環境は与えられなかった。兵士たちが収容された兵舎病院は恐ろしく不潔で、その上彼らには清潔な寝具や衣類やスープさえも支給されなかった。戦地で負傷した兵士たちの多くは、こうした劣悪な病院に収容されたがために、重い感染症を罹って、落とさずともよい命を落としていったのである。

このような状況の中にナイチンゲールは自ら望んで飛び込んだのであるが、2年弱にわたる滞在中に、彼女が成し遂げた仕事の内容を大まかにまとめてみると、以下の3点に集約できる。

第一に、兵士がおかれた不潔で、非人間的な環境を改善して、そこを人間の住まいとして、また病気の回復過程を早めるための器として整えたことである。

第二に、兵士たちに同じ人間として接し、彼らを励まし、必要な手当てを十分に行ない、彼らの持てる力を引き出していったことである。

第三に、回復期に入った兵士たちのためには、学校を建てて教育し、図書室を造り、郵便局のシステムを考え、彼らが社会人として生きていくための具体的援助を惜しまなかったことである。

その結果、いくつかのすばらしい変化が起こった。

そのひとつは、ナイチンゲールがクリミア戦争に介入してからわずか半年後に、スクタリにある巨大な兵舎病院の死亡率が、42,7%からなんと2,2%まで下がったことである。それは彼女が病院中を徹底的にきれいに磨きあげ、病気の温床となる汚物を除去し、換気を十分に行ない、兵士たちに温かなスープを与え、清潔な寝具と衣類を支給し、身体を清潔にし、適切な食物を選択し、供給した結果であった。

それは正に「看護の成果」としか言いようのない出来事であった。

しかし、この場合ナイチンゲールは、思いつきでこの改革を行なったのではなく、きわめて科学的にこの結論を導いていたのである。その思考のプロセスは、彼女が帰国後に著した『英国陸軍の死亡率<sup>9)</sup>』に詳しく述べられていて興味深い。その改革のポイントは、綿密に作製された統計表に基づいて導き出された推論を実現化したものであったということである。

すなわち、少なくとも17の統計表と12の図(ナイチンゲールは統計を独特のグラフで表示する方法を考案し、この方面でも先駆者となった)が意味するところを探っていくと、その図から得られる教訓を取り出してみると、兵士たちの死亡の直接的な原因は、彼らのおかれた劣悪な環境条件と看護の不足にあるという結論が出てきたのである。彼女はこの結論に基づいて行動を起こしたことになる。

当時においてはまだめずらしかった、この“社会統計学”の手法を駆使し、科学的裏付けを得て、改革に取り組んだナイチンゲールの姿勢は、今日の社会学者のそれと少しも変わらない。看護に科学の眼が導入された証拠である。

さて、この第一の改革から言えることは何であろうか？ それは、兵士たちのおかれた状態や苦痛に対して、単にセンチメンタルな同情を寄せたり、朝から晩まで闇雲に働き続けたりすることは、兵士たちの真の救援にはほとんど役に立たないということである。

ナイチンゲールは、看護の本質に照らし合わせて事を考えたのであり、その場合、まず兵士

たちがおかれた生活の質に眼を向け、病気や負傷の回復過程が妨げられないような条件を、その生活過程の中に創り出すことに力を注いだのである。

これがナイチンゲールが主張する“救貧”の本質であり、根源的テーマでもある。

ナイチンゲールのかかわりによって、大きく変化したもうひとつの側面がある。それは兵士たちが「野獣」から「規律ある人間」に生まれ変わったことである。

この変化は、ナイチンゲールが兵士たちを人間とみなし、彼らの生命力を信頼し、その能力を引き出すための援助を惜しかなかった結果である。

兵士を人間とみなすこと、これは、当時の英国社会の上流階級の人々にとっては、破格のテーマであったはずである。なぜなら、社会の底辺の人間は、彼らにとっては「動物」か「屑」以外の何ものでもなく、貧困層の人間と口をきくこと事態が、一般的に非常識と考えられている時代なのである。

したがって、クリミアの地でナイチンゲールが行なったことは、その時代の制約を大きく打ち破った“新しい”ものの見方に立ったものであることが解るのである。そこには時代を超えた新しい“人間観”が存在するといっても、過言ではないのである。

実際、兵士たちはナイチンゲールによって手厚く看護されたのであり、誰一人として差別を受けたことがなかった。兵士たちは「自分たちはこれまで上流階級の婦人にこのように人間扱いはなされたことはなかった」と語っている。

そのナイチンゲールのかかわりは、看護という理念の具現化であり、彼女は決して単に兵士たちに安っぽい同情を寄せたわけではない。

ナイチンゲールが発見した「看護」は、相手の生命力を信頼して、そこに働きかけることであり、その生命力の消耗を最小にするように、一人ひとりの状況に合わせて生活過程をととのえていくことである。それは、人間の身体の構造と法則性とを熟知してこそできることであり、

そこに看護の難しさと科学性とがあるのだが、逆に、だからこそ、人間は皆身体の造りに関しては平等であり、同じ自然の法則の下に生かされている存在であるという認識が育つのである。

ナイチンゲールの、病んだ身体の回復に向けての行為に差別があってはならないという認識は、こうした観点から説明できる。

さらにナイチンゲールは、「看護」の思想の中に、その人のもてる力を十分に発揮せさせて生かすというテーマを加えている。別言すれば、自己の能力を十分使って、自立した行き方を実現することに、看護という仕事は寄与するのだと力説したのであった。

この点に関するナイチンゲールの具体的実践が、教育施設と各種更生施設の開設という形で表れている。ナイチンゲールは兵士たちに向けた看護の最終目標を、“自立して生きていくための能力の獲得”というところにおいていたことがこれでわかるはずである。

以上、クリミアにおけるナイチンゲールの実践の中から、彼女の“救貧”に対する思考の原点をみてきたが、そこには二つの視点が存在することが明確になった。

第一点は、対象者の生活の質をみつめて、その生活過程を健康的な状態にととのえることである。

第二点は、対象者のもてる力を十分に引き出し、彼らが自力で生きていけるように、社会的な援助・方策を施すことである。

この二点が、そっくりそのまま『救貧覚え書』の中心課題として引き継がれていることは、ここで改めて取り上げるまでもないであろう。

### 3. 「看護思想」とは何か

第2章では、クリミアにおけるナイチンゲールの実践の“質”を考察してきたが、そこで明らかになった“原点の思考”が、正に彼女の“救貧”のとらえ方であり、これは、看護の思想の中心課題と重なるものであるということが浮き彫りになった。

そこで、本章では、改めて「看護思想」とは何かに迫ることになる。その概要は、ナイチンゲールが著した数編の論文が明らかにしているので、ここではその中核にあたる“看護とは何か”というテーマと並んで、“健康とは何か”というテーマに接近する。

さらにその思想の襲に、彼女のクリミアの実践や帰国後の様々な救貧活動を折り重ねることによって、「看護思想」の社会における具体的な表現形態を確認してみたい。

それでは、ナイチンゲールが明らかにした“看護の思想”とはいかなるものであろうか？  
まずは、看護の定義からみていこう。

彼女は「看護の機能」や「看護の定義」を表現するにあたって、その前に「病気とは何か」を明確にしている。看護のとらえ方は、病気のとらえ方の延長線上にあると考えたからである。

では、病気とは何か？ それは「健康を阻害してきたいろいろな条件からくる結果や影響を取り除こうとする自然の(動きの)過程である<sup>9)</sup>」という。そこには身体内部の自然治癒力と身体メカニズムを大切に考える考え方が宿っている。

また別の論文では、次のようにも表現している。「すべての病気は、その経過のどの時期をとっても、程度の差こそあれ、その性質は回復過程であって、必ずしも苦痛をともなうものではないのである<sup>10)</sup>」と。

病気とは、その人の生命力がもたらす回復過程であるというこの見方は、並みの人間観察からは出てこない。その底には、人間の生命力に対する揺るぎない信頼と安心感と、さらには冷徹な生命体の構造と機能に関する洞察力とが必要である。

看護は、生命体の持つ回復力とその成長力に、絶対的な価値を寄せ続けなければ成立し得ない仕事であることを、この内容は教えている。

では、ナイチンゲールの「看護の定義」をみてみよう。

「看護とは、健康を回復し、また保持し、病気や傷を予防し、またはそれを癒そうとする自然の働きに対して、できる限り(それを受け入

れる)条件の満たされた最良の状態に私たち人間をおくことである<sup>9)</sup>」

「癒そうとしているのは自然であり、私たちは自然の働きを助けなければならないのである。自然は病気というあらわれによって癒そうと試みているが、それが成功するか否かは、部分的には、いやおそらく全面的に、どうしても看護のいかにかかってこざるをえない。したがって、看護とは、患者が生きるよう援助することである<sup>10)</sup>と……。

まさに看護とは、その人の生命力そのものにはたらきかける仕事であり、その人の生命力が十分に発揮できるように援助することであると言い切ることができる。

そのためには、生命力(自然の力)が十分にその働きを全うするための、条件を創ることが重要であり、その条件が満たされた最良の状態に生命体をおくことが、本来の看護のあり方だということになる。

こうした考え方を土台として、ナイチンゲールの看護活動の展開をみつめてみると、その意味するものが掴めてくる。

たとえば、兵舎病院における徹底した環境改善は、不潔な環境によって、これ以上兵士たちの生命力を害なうことのないようにという考えから出たものであり、温かい飲み物や適切な食事の供給、身体の清潔、清潔な衣類の支給、看護婦たちのすぐれた看護技術等の提供は、兵士たちの身体に宿っている生命力が、その力を十分に発揮するための条件づくりの一環であったということになる。

この視点は、第2章の最後の指摘した、ナイチンゲールの“救貧”に対する思考の原点の第一番目の項目と一致する。要するに、看護は、対象者の生活のあり方と質とに眼を向け、その人の生活過程や生活条件を健康的にととのえることと同義なのである。

この同じ発想をもって、ロンドンの貧民層の暮らし方を見た時、そこに繰り広げられている悲惨さは、まさしくクリミアにおける兵士たちの生活と、同じ質のものであると見えてくるは

ずである。

だからこそナイチンゲールは、“貧民を救済する”という“救貧”のテーマの解決策を、貧民たちに「健康的な暮らしを取り戻させること」においたのである。

この“救貧”のとらえ方は、まさに看護の定義の社会事業への適用である。

ところで、ナイチンゲールは、社会全体が抱えていた救貧というテーマに向けて、単にあるべき論を唱えたのではなかった。貧民たちの生活を健康的なものにすることによって、彼らが幸せに生きていけるように援助するための具体策を提案し、自ら実践に移したことが知られている。

それは端的に言って、病院看護婦の養成であり、地域看護婦の養成であった。要するに、ケアワーカー(援助者)の育成に力を注いだのである。

救貧院にいる病人たち全員を救貧院病院に移して、病院看護婦による病人のケアを行なうと同時に、地域看護婦による在宅の病人のケアと、健康な貧民の暮らしの立て直しに、看護の総力を傾けた事実がこのことを裏付けている。

それはまた、「健康を回復し、または保持し、病気や傷を予防し、またはそれを癒そうとする自然の働きに対して、できる限りそれを受け入れる条件の満たされた最良の状態」づくりでもあり、看護の定義の具体的実践の姿でもあったといえよう。

ところで、ナイチンゲールの指摘には、もう一点、大切な押さえがある。

それは、健康についての定義である。

それは、看護のあり方を思考する時、羅針盤のような役目を果たす。

「健康とは、たんに元気であるだけでなく、自分が使うべくもっているどの力をも充分に使う状態である<sup>11)</sup>」

実に短い言葉であるが、この“もてる力の活用”というテーマそのものの中に、人間のあり方を根底にすえた、看護の目標が指し示されているのである。

この定義を延長させて考えてみると、人間にとっての健康とは、“その時々において、自分が持っている能力を十分に使い、自立した生活を達成するか、もしくは限りなく自立に近づいていこうとしている状態”であると解釈できる。

ここにも、生命力に対する限りない信頼がうかがわれるが、それがナイチンゲールの“救貧”のとらえ方のもう一つの流れになっていることに気づかされるのである。

すなわちこの視点は、第2章の最後の論点の二番目を構成している。「対象者のもてる力を十分に引き出し、彼らが自力で生きていけるように、社会的な援助、方策を施すこと」というのがそれである。

そして、この同じ視点を、英国全体の救貧対策の根底におくよう、関係筋に働きかけたのである。

以上みてきたように、ナイチンゲールの“救貧”のとらえ方は、明らかに「看護思想」の延長線上にある。

ナイチンゲールにとって、英国の貧困層を救うという事業は、看護の機能の社会的拡大を意味したのである。

#### 4. 看護思想と社会福祉思想の接点とその重なり

さて、こうして看護のめざす方向性とそのあるべき内容を考察してみると、それは、今日力説されている社会福祉の理念と大きく重なっていることに気づくはずである。

“病人への看護”という具体的なテーマを除けば、“自立への援助”“自助力の活用”という課題は、むしろ福祉分野が力を入れて取り組んでいる視点であるし、“日常生活の拡大”や“生活の質の査定と向上”という視点も、福祉実践者たちがめざすところとなっている。

そこで第4章では、新たに社会福祉思想の内容に立ち入って、福祉思想がめざすものを見極めつつ、それが第3章までに明らかになった看護思想と、どのように重なっているのかを明ら

かにしたいと考えている。

さて、社会福祉とはいったい何だろう？

残念ながら現時点においては、「社会福祉とは何か」という定義は、明確にされてはいないようである。

しかし社会福祉は、古来、社会システムの変化と共に歩んできた歴史があり、その中で、社会政策的なテーマを中心にして、実践分野を伸ばし、かつ深めてきたという経緯がある。

したがって、現代に至って、社会福祉に関する研究量とその実践の積み重ねには相当な蓄積があり、それらを貫く「社会福祉学」の構築という課題が、急務になっている現状である。

広大な関連領域を有する社会福祉研究を、京極高宣は次のように分類している。

「社会福祉研究における学的接近方法（学問的アプローチ）は福祉システム自体を反映して、いわば政策論的アプローチから、1. 哲学的接近、2. 法学的接近、3. 経済学的接近が、またいわば臨床論的接近については、1. 医学的接近、2. 心理学的接近、3. (応用) 社会学的接近が最有力な分野として存在する<sup>20)</sup>」と。

しかしながら、こうした接近を繰り返したところで、福祉固有のテーマが明確になるとは思えない。そこには、時代や場や社会システムの変化を越えた、普遍的な法則が存在しなければならないだろう。

この点についても京極は言う。「社会福祉研究を学問論からみて、いわゆる社会福祉学（または現代福祉学）へ発展させるには、たんなる学的接近法の整備ではすまされないものがある。すなわち、社会福祉研究はその学的対象の性格からして、学際的（インターディシプリナリー）で多元学的（マルチ・サイエンス的）であるとしても、連字符の各〇〇福祉学を列挙して、それを寄せ集めても、ひとつの独立した学問体系（a science of its own）にならないように思われる<sup>21)</sup>」と……。

福祉固有のテーマを明確にする上においては、福祉を支える「目的」が必要である。

では、社会福祉の目的はどこに定まるのであ

ろうか？

この点を考えるにあたって、まず「社会福祉一般」について語っている文章を見てみることにする。

「社会福祉とは人間のより良い生活を望みつつも、現実の社会に発生する生活上の諸問題を担う人びとに対する援助としてなされる社会の制度、政策、実践の総称である<sup>(22)</sup>」

「福祉というのは、暮らしのあり方であり、それをめぐる社会方策、また、積極的な社会的努力を“社会福祉”というふうに呼んでいい<sup>(23)</sup>」

この両文章の中で、共通してみられる認識を取り出してみると、1. 福祉というのは暮らしや生活を対象にしているということ、2. 福祉は、生活上の諸問題に対応する方策を考えて実践すること、となる。

しかしながら、ここからは、何のために、または何を目指して、という「目的」意識がうかがえない。

暮らしをどのようにしたいのか、何のために社会方策を考えるのか、さらには、どうすればなされた実践が福祉であったといえるのか、といった目的が指し示されていないのである。

また、福祉 (welfare) は、人間の幸福の実現に寄与するものである、ともよく言われる。

しかしここでも、人間の幸福とは何かが解かれていない限り、その言葉だけでは、実践の具体的な目標とはなりにくい。

現われている現象の意味を解くだけの理論 (目的論) がなければ、ナイチンゲールの時代にそうであったように、社会現象の解決のために、いくら多額のお金や労力が注ぎ込まれても、それらが無駄になるばかりか、かえって人間に害を与えるかも知れないのである。福祉実践者個々人に、たとえ燃えるような情熱があったとしても、それだけでは福祉全体を支え切ることができないだろう。

そこで、「福祉の目的」となる部分を、「看護思想」の中に探ってみることにした。

ナイチンゲールが力説した看護のあり方も、

一言でいうならば“暮らしをととのえる”ことであった。この部分に関しては、福祉の指向するものと少しも変わらない。

しかし、ナイチンゲール思想にはそこに、人間が「健康に生きるため」あるいは「健康を回復するために」という目的が加わっているのである。

この「健康」というテーマこそ、看護と福祉とが共有することのできるものである。したがって、社会福祉の目的を“国民の健康の実現のために”と据えれば、そのありようが今より一段と明瞭になると思うのである。

そしてなおかつ健康の定義を、ナイチンゲールのいうように、「自分の持てる力を十分に使って、限り無く自立した生活に近づくことである」と規定すれば、今、福祉現場でとらえている“自立に向けた援助”や“日常生活の拡大”などというテーマはその思考の延長線上に出てくるし、“過援助”の問題をとらえる視点も明確になるのではないか。

さらには、個別的な問題を超えて、社会政策的な問題を考えるに当たっても、この「健康」を志向する認識を持つことによって、人間の健康にとって、今どうすることが最も大切な方策か、という具体的な解決の方向軸を定めることができるのではないかと思う。

これが、筆者の考える「看護思想」を通してみた社会福祉の原点であり、看護思想との重なり部分である。

要するに、看護と福祉とは、その「目的」において同一であり、同じ座標軸にあるのである。またそうでなければ、人間の本当の幸福を実現できないわけで、看護と福祉とは、理念上においても、実践上においても、限りなく近い領域なのである。

先の京極が「社会福祉学も少なくとも処遇と政策に分かれると思われるが、社会福祉学は両者をできるだけ統合して、教育学や保健・看護学などに非常に近い分野として把え直してみる必要がある<sup>(24)</sup>」と述べているが、学問構築のプロセスの中で、この「目的論」に当たる領域に

も、光が照らされる日が来ることを期待したい。

## 5. 『救貧覚え書』の 教育的活用効果について

筆者は、毎年介護概論の講義において、『救貧覚え書』を学生たちに読ませるという試みを行なっている。その学生の反応には、当初、筆者自身が考えていた以上のものがあったので、第5章のテーマとして紹介するものである。

筆者は、1988年4月から淑徳大学の学生を対象として、2単位の講義を受け持っている。1990年7月までに当講義を受講し、単位の取得に努めた者は、合計828名である。

また一方で、共栄学園短期大学においても、1990年4月から同様の講義を受け持ち、40名の学生が聴講した。

両学生を合わせると、868名におよぶ。

共栄短大では1年生が受講の対象であり、淑徳大学では2、3、4年生が対象になっている。

学生に明示した課題は、「F・ナイチンゲール著『救貧覚え書』および『対談・救貧覚え書をめぐって』を読んで、“福祉と看護”の接点について、感想レベルでの考察を加えなさい」というものである。

ただし、この課題を提示した時期は、介護概論の授業のほぼ半ばあたりであり、この覚え書を読むに当たっての解説はほとんどしていない。学生たちは、いわば自力で読み進み、これまでの学習との関連を通してレポートを書くことになる。レポートの指定枚数は、400字詰め原稿用紙に3～5枚である。

このレポートの評価は、単位認定にかかわるが、授業終了後に行なう試験とは区別し、その評価の重みを軽くしてある。

では、学生たちの反応はいかんなものであったのだろうか？

彼らの意見は、以下4点にまとめることができた。必要に応じて学生の意見をそのまま紹介しながら考察していくことにする。

第一点目は、ナイチンゲールという人物に対

する彼らの認識不足についてである。

ナイチンゲールという名前は誰もが知っているが、彼女の真の姿や業績を知る者は皆無に等しい。学生たちは、一様にナイチンゲールという人物のスケールの大きさと思想の深さに驚き、彼女はクリミアの天使でもなければ、単なる看護婦でもなかったのだと知ることになる。

それが第2点目の思考につながっていく。すなわち、彼らが再発見したナイチンゲールは、看護婦としてではなく、福祉思想家としての、または福祉実践者としてのナイチンゲールであったということである。

「ナイチンゲールは、看護はもちろんのこと、社会福祉においても創始者といえるのではないのでしょうか。私には『救貧覚え書』は今日の社会福祉のあり方を問う、ナイチンゲールからのメッセージのような気がしました」(88288)

「今までは“看護”というと漠然と看護婦を連想し、怪我人や病人の手当てや世話をすること、そんなふうにしかなかったことにはなかった。つまり、医療と関係のあることであって、福祉などとつながりがあるとは思ってもみなかったのである。しかし、ナイチンゲールの“看護”に対する考え方を知って、それは誤りであることがわかった。“看護”とは、決してそんなに単純なものではなく、もっと深い意味をもったものであったのだ。視点を変えて“福祉”や“看護”というのを見てみると、意外にもつながりの深いものであるということが見えてきた」(88365)

「福祉やソーシャルワーカーという言葉が現実的な施策をイメージさせるのに対し、看護を实践する看護婦には、ナイチンゲールから100年以上経つ現在でも、“白衣の天使”といったイメージが大きい。が、その“白衣の天使”の象徴であり、先駆者であるはずのナイチンゲールが、現在の福祉にも通じる現実的な側面のクールな観察者であったことは興味深い」(87020)

「看護というと、どうしても病人の世話をすることのみを思い浮かべてしまいがちです。ところがナイチンゲールは、病人の世話のみなら

ず、健康な人も貧しい人もその対象として、その人の生活を整えることが看護だといっています。今まで“生活を整えること”は福祉の守備範囲だと決めてかかっていた。そうして決めてかかるのではなく、もっと頭を柔らかくして考えると、いろいろなことがみえてくると思いました。」(87186)

「ナイチンゲールの考え方を知らなければ、私は看護のとらえ方を本当に狭いものにしていただろう。福祉の接点もみつけれなかったかも知れない。ナイチンゲールの看護のとらえ方は、看護を学ぶ人にも、福祉を学ぶ人にも、大きな影響を与えていると思う。このような影響を与えたものが、百年以上も前に書かれたものであるということに驚いてしまう」(88275)

このように、学生たちは、ナイチンゲールを自分たちとかかわりがある福祉の領域においても、有用な人物であると認識するに至っている。

第三番目に言えることは、今日の福祉思想の中心である“自立への援助”の視点を、改めてナイチンゲールの思想から学び直したということである。

「100年以上も前に、看護という分野で生きたナイチンゲールが、この自立という考えを持っていたことに驚愕しながらも、彼女の考え方の基盤となっている生命力への信頼のなかに、福祉的な考えを見付けて納得した。生命力への信頼は、その生命の回復力への信頼であり、同時に自立への信頼であり、そのことは人間性の回復への信頼につながる。人間性の回復とは、人間が人間らしく生きるという福祉の理念と考えを同じくするように思える」(88009)

「現在の福祉の目的・理想となっている考え方を、当時のナイチンゲールがすでに考えていたことに驚いた。その考えとは、その人の持っている可能性というものを信じて、自立できるような機会を与えるような政策にしなければならないというものです。……本当に『救貧覚え書』は、これからの福祉の課題である“自立助長のための施策”、さらに、現代の社会福祉を考える材料になるのではないかと思います」

(88062)

「<豊かな国が、発展中の国に援助をする。どういった援助が望ましいか。魚を送るのではなく、魚の釣り方を教えることが大事、という例え話をよく聞く。それはそうだ。魚をいくらたくさんもらっても、食べてしまえば一度で終わりだ。それより、自力で魚をとる方法を覚える方が、長い目でみれば役に立つ。豪華な魚も困りものだ。発展中の国に使いこなせないような、金のかかる最新式設備が喜ばれるとは限らない。その場の必要に応じて手助けをすることがなにより大切だ>これは、6月21日付けの朝日新聞朝刊の天声人語の記事の抜粋です。私はこの記事を読んだ時に、ナイチンゲールが考えていたことは、対象こそ違いますが、まさに同じだったのではないかと思います」(88288)

このように、彼らはナイチンゲールの援助の視点を、自分たちが学んだ福祉に結びつけて考え、また、その中から今日の社会現象に対する真の援助のあり方までを考察しているのである。

次は四番目の視点である。

それは、福祉と看護の共通要素に対する認識であり、看護のはたらき(看護の機能)と社会福祉機能(社会政策・施策)との重なりに対する認識の広がりについてである。

「“福祉と看護”の接点とは、“生活をととのえる”という同じ目的を持ったところにあるのではないかと思います。私は、『救貧覚え書』を読んで、4年目にしてやっと、“社会福祉”というものがわかった気がします。同時に人間の生命力を信頼することが、人間自身をも信頼することになるのだと気づきました」(87230)

「ナイチンゲールは救貧問題などを非常に広い視野でとらえている。これらは、彼女の“看護”思想の延長上でとらえていることに感激しました」(88113)

「ナイチンゲールは、社会的病理からくる人間の非健康的なものを取りのぞくために、さまざまな政策を打ち出したのであるが、それは、ナイチンゲールが看護の立場から、患者個人ではとうてい癒せないことを、行政レベルで行な

おうと考えたからである。いわば、イギリス社会そのものを患者としてみなして、看護をしようとしたのであろう」(88091)

上記3名の指摘は見事という他はない。

このように、学生たちは自分の力で読み切り、自分の頭を使って考えたそのままをレポートに寄せてきた。

彼らのほとんどは『救貧覚え書』の本質をつかみとっていた。そしてナイチンゲールの主張に耳を傾け、現代の社会現状と比較し、福祉の思想と照らし合わせながら、その覚え書の趣旨の今日的価値を認めたのである。

この事実は、筆者を戸惑わせた。

なぜなら、学生たちがこんなにも真剣に、このテーマと取り組むなどとは期待していなかったし、何よりも、このテーマがこれほど福祉を学ぶ学生に身近なものとは、予想していなかったからである。

彼らの意見の数々を通して、授業では触れることのできなかつた“看護と福祉”の接点とその重なりを、彼らは十分に、そして深く理解していると確認できたことは、筆者自身の教育観と、学生に対する信頼感を広げるのに大いに役立った。

また、そのことによって、ナイチンゲールが書いた知られざる著作『救貧覚え書』が、現代福祉教育の中で十分に活用でき、かつ教育的効果をあげることができると立証できたわけで、それは、これからの社会福祉教育と看護教育とのあり方を思考する上で、たいへん意義のある出来事だと言わなければならない。

## 結 び

「社会福祉士及び介護福祉士法」の成立によって開始された両福祉士の教育カリキュラムの中に、介護概論の講義が組み込まれているが、そこで何を教授するかという問題は、福祉分野にとっても、また看護分野にとっても大きなテーマである。

介護は、看護分野からみれば明らかに看護の

一部である。しかし、福祉分野からみた介護は、これまた明らかに福祉の一部であるはずである。

介護がどちらの分野に属するのかという論争は、全く意味のないものである。

この場合、明らかにしなければならないのは、「介護とは何か」を本質のレベルで解くことである。

このテーマは、福祉の概念を使って解いてもいいし、看護の概念を使って解いてもいいだろう。行き着くところは、本質的には結局は同じであるはずだからである。

しかし、「介護とは何か」は、「看護とは何か」という理解の延長線で、すでにはっきりと解けている。

それは、本論文で述べたナイチンゲールの救貧のとらえ方の中にもみられるが、介護とは、人々の暮らしを健康にととのえることなのである。

それは、筆者が明らかにした看護の目標でもあり、福祉の目標にもなるものであった。したがって、介護は当然、両分野をつなぐ機能を持っているのである。

さて、本稿で取り上げた『救貧覚え書』は、120年も前に書かれたものであるにもかかわらず、このようにこの論文を考察することによって、現在ののびきならないテーマをも解く手がかりになるとしたら、福祉の人々も、看護の人々も、もはやこの『救貧覚え書』の存在を見過ごすことはできないであろう。

## 【引用文献】

1. F.Nightingale: 向野宣之, 金井一薫訳: 救貧覚え書, 総合看護, 20-1, 1985, p.57.
2. 小山路男: 西洋社会事業史論, 光生館, 1988, p.172-173.
3. F.Nightingale: 向野宣之, 金井一薫訳: 救貧覚え書, 総合看護, 20-1, 1985, p.58.
4. 同 上 p.60.
5. 同 上 p.64.
6. 同 上 p.67.
7. 同 上 p.60.

8. 同上 p.64.
9. 同上 p.75.
10. W.J.Bishop : A Bio-Bibliography of Florence Nightingale. Dawsons of Pall Mall, 1962, p.107.
11. F.Nightingale: 向野宣之, 金井一薫訳: 救貧覚え書, 総合看護, 20-1, 1985, p.78.
12. 同上 p.79.
13. Cecil Woodham-Smith : 武山満智子, 小南吉彦訳: フロレンス・ナイチンゲールの生涯, 現代社, 1981, p.219.
14. F.Nightingale: 松野修, 久繁哲徳訳: 英国陸軍の死亡率, 総合看護, 23-4, 1988, p.7~37.
15. F.Nightingale: 湯楨ます監修, 薄井担子, 小玉香津子他訳: ナイチンゲール著作集 (第2巻) 現代社, 1974, p.97.
16. F.Nightingale: 薄井担子他訳: 看護覚え書. 現代社, 1983, p.1.
17. F.Nightingale: 湯楨ます監修, 薄井担子, 小玉香津子他訳: ナイチンゲール著作集 (第2巻) 現代社, 1974, p.97.
18. 同上 p.97.
19. 同上 p.97.
20. 京極高宣 : 現代福祉学の構図, 中央法規出版, 1990, p.8.
21. 同上 p.9.
22. 小田兼三, 中村永司, 日高沙千江 : 社会福祉概論/看護・保育・福祉実践のために, ミネルヴァ書房, 1988, p.3.
23. 一番ヶ瀬康子編著: 社会福祉とは何か/現代社会福祉 I, ミネルヴァ書房, 1989, p.8.
24. 京極高宣 : 現代福祉学の構図, 中央法規出版, 1990, p.44.
5. (上・下巻), 現代社, 1981.
4. 京極高宣, 金井一薫: (対談) F・ナイチンゲールの『救貧覚え書』をめぐって. 総合看護, 20-2, 1985.
5. F.Nightingale: 松野修, 久繁哲徳訳: 英国陸軍の死亡率 (前編), 総合看護, 23-4, 1988.
6. F.Nightingale: , 久繁哲徳, 松野修訳: 英国陸軍の死亡率 (後編) 総合看護, 24-1, 1989.
7. 小玉香津子: ナイチンゲールの統計, 総合看護, 24-1, 1989.
8. 重田信一編著: 社会福祉概論, 建帛社, 1990.
9. 古瀬徹, 京極高宣, 小南吉彦: (座談会) スウェーデンの保健福祉の動向/日本の保健福祉の今後を考えつつ, 総合看護, 25-3, 1989.

#### 【参考文献】

1. W.J リーダー: 小林司・山田博久訳: 英国生活物語, 晶文社, 1983.
2. L.C.B.シーマン: 社本時子, 三ッ屋堅三訳, ヴィクトリア時代のロンドン, 創元社, 1989.
3. Cecil Woodham-Smith : 武山満智子, 小南吉彦訳: フロレンス・ナイチンゲールの生涯,